

ふく はら ゆう いち
福 原 裕 一

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博 第 85 号

学位授与年月日 平成20年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期 3 年の課程)
国際文化交流論専攻

学位論文題目 若者言葉のフェイス・ワーク
ーフェイス保持に関わるディスコース・マーカースの考察ー

論文審査委員 (主査)

准教授 中 本 武 志

教 授 小 野 尚 之

教 授 宮 本 正 夫

准教授 ナロック ハイコ

教 授 上 原 聡

論文内容の要旨

1. 研究の動機と目的

米川(1998)は、若者言葉が誕生する背景には、社会やマスコミ(いわゆる大人たち)の影響が大きいと指摘し、このような若者言葉は、社会や世相をよく反映していることから、若者言葉を研究することで、現代の若者と社会との関係を明らかにし、さらには、若者の価値観をも浮き彫りにすると主張している。本論文が若者言葉を研究の対象にした理由もここにある。

米川は、若者語には仲間意識を強める「連帯機能」、会話のテンポを良くする「会話促進機能」、相手の感情を傷つけることを避け、相手への印象をやわらげる「緩衝機能」があると指摘する。会話促進機能や緩衝機能は、それを使うことで、話し手の「同じ集団として見なされたい」という気持ちや、聞き手に対しての配慮を表すことから、「対人調節機能」を果たしていると言える。

今回本論文で考察した若者言葉は、従来から使用されてきた表現が、若者による新しい用法として「対人調節機能」を獲得したと考えられる、主に文頭で使用される「なんか」「ていうか」、文末で使用される「みたいな」「じゃん」、そして、文中で使用される「とか」をあわせ、合計5つの若

者言葉の用法を扱った。この5つの言葉がそれぞれ、どのような対人調節機能を果たすのか、また、従来の用法との関係や、どのように意味機能的に拡張したものなのかを明らかにすることが本論文の最大の目的である。その際、実際に若者の会話データを使用し、そのなかから、上記5つの用法が使用された会話を、コンテキストを考慮しながら入念に観察し、それぞれの用法が話し手と聞き手に対して果たす、対人調節機能を考察した。

2. 理論的枠組み

2.1 ポライトネスとフェイス・ワーク理論

本論文では、若者言葉「なんか」「ていうか」「みたいな」「じゃん」「とか」を、Schiffrin (1987) で言われている、ディスコース・マーカー (discourse marker, 以下「談話標識」) として扱い、これらが会話において果たす機能 (主に対人調節に関わる機能) を明らかにする。Schiffrin によれば、談話標識とは、談話の中で何らかの機能 (接続, 言いよどみ, 話題転換など) を果たす語句のことを言い、これらは、与えられた文脈において、発話と発話の関係, 話し手と発話の関係, または、話し手と聞き手の関係を明らかにするものである。対人調節機能については、本論文が提唱する「フェイス・ワーク」理論によって、考察していく。

フェイス・ワークとは、Goffman (1967) によって提唱された概念であるが、フェイスの定義には Brown & Levinson (以下: B & L) を採用しつつ、聞き手のフェイスと同時に話し手のフェイスも保つ行為, または、話し手のフェイスのみを保持したり, 相手のフェイスを潰す行為も広くフェイス・ワークと呼ぶこととする。ただし、本論文ではフェイスの保持機能に焦点を絞り、フェイス侵害機能についてはごく簡単に触れるだけにとどめ、詳しくは今後の課題とせざるを得ないことをおことわりしておく。

また、本論文の提唱するフェイス・ワーク理論は、B&L のポジティブ・フェイス (以下: PF) とネガティブ・フェイス (以下: NF) の概念を、拡大・再定義したものを採用する。B&L が主張する PF と NF は、例えば PF なら、「仲間になりたい」「非難されたくない」などといった気持ちが同一に扱われているため、非常に分かりにくくなってしまえばかりではなく、矛盾が生じることさえある。例えば次の例を見てみよう。

- (1) 「田中君 とか, 今まで女の子と付き合ったことないでしょ?」

例 (1) の「とか」は、若者言葉に特徴的な用法であり、先行する部分が一例であることを示し、断定を避ける機能がある。話し手がこのように断定を避ける理由には、聞き手の NF「押し付けられたくない」に配慮すると同時に、このようなことを言ったことで、話し手の PF「非難されたく

ない」が傷つかないように保持するためであり、この場合、同じ PF の特徴として挙げられている「仲間になりたい」を保持しているとは言えない。(1)における、聞き手の NF についても同様に、「自由でいたい、邪魔されたくない」というよりも「(話し手の意見や考えを)押し付けられたくない」への配慮と言える。そこで、本論文では、話し手と聞き手の間で行なわれる、より詳細なフェイス・ワークを見るために、B&L の PF・NF の概念を以下のように再定義した。

(2) PF・NF の再定義

PF の【肯定的特徴】：理解されたい、仲間になりたい（以下：【PF+】）

PF の【否定的特徴】：非難されたくない、嫌われたくない（以下：【PF-】）

NF の【肯定的特徴】：自由でいたい、独立していたい（以下：【NF+】）

NF の【否定的特徴】：束縛されたくない、押し付けられたくない（以下：【NF-】）

このように、PF と NF を「肯定的特徴」と「否定的特徴」に分類することで、従来の PF・NF の考え方では明らかにできない話し手と聞き手の間で行なわれるフェイス・ワークをより分かりやすく見ることができる。

2.2 若者言葉と文法化

本論文で分析対象とする若者言葉は、若者に限らず、いわゆる大人も従来から使用していたものが、最近になって若者独自の用法で使用されているものである。内田（2001）、福原（2005）、メイナード（2004）などの先行研究は、これら若者言葉は、従来の用法が若者によって意味的に拡張されたと主張している。本論文でも、これらの若者言葉が、従来の用法からどのような過程を経て拡張したものなのかについても考察していく。その際に、Traugott（1982）の主張する「文法化」の概念も導入する。秋元（2003）は、命題的→（テキスト的→）対人的という過程を経て、ある語句が談話標識へと拡張すると指摘している。本論文では、いかに自分のフェイスと相手のフェイスを保持し人間関係を円滑にするかといったフェイス・ワークが行なわれるものを対人的と考える。

本論文も秋元の主張する、談話標識の文法化における過程を参考にして、若者言葉の意味拡張について論じる。

2.3 使用したデータと会話分析

本論文は、実際の若者による会話から、研究の対象とする若者言葉を収集し、これを分析する。若者言葉の収集には、テレビ番組「真剣10代しゃべり場」（NHK教育放送）を使用した。この番

組は参加者の10代の男女が、与えられたテーマについてディスカッションを行うものであり、あらかじめ台本などが用意されていないことから、比較的自然会話に近い形と言える。この「真剣10代しゃべり場」の2004年6月から2005年7月にかけて放映されたもの、約280分を全て文字化した。これは、前後のコンテキストも考慮するためである。文字化については、ナロック（2005）の方法に従った。

会話分析の手法をとった理由は、問題とする若者言葉がどのようなコンテキストで使用されているのかを丁寧に考察するためである。同じ若者言葉であっても使用されるコンテキストの違いがフェイス・ワークにも現れると考えるためである。

3. 結果

3.1 「なんか」についての考察結果

不定代名詞「なんか」は、その意味機能である「不特定な指示」や「他の可能性の示唆」の意味を弱めつつ、それぞれ副詞の「なんか」および、とりたてて詞「なんか」へと用法を拡張させるとともに、テキスト的に文法化している。さらに若者言葉においては、不定代名詞「なんか」ならびに副詞「なんか」の意味の希薄さ、指示の不定性からフィラーの用法が生じ、対人的機能に文法化したと考えられる。

若者が口ぐせのように使用する「なんか」は「不特定な指示」や「他の可能性の示唆」の意味が完全に消失したものであった。

(3) あたしは自分はな なんか、なんか、その、なんか、それを言われた時は…

(4) なんか あたし、そのま付き合ったこととか何回かあったんだけど…

(5) さっき なんか 学歴とりゃいいと思ってるやつは？…だめだみたいなこと言ってたけど…

(3) (4) のような「なんか」は、発話権の保持や獲得のために使用されるフィラーであり、話し手が自分の【PF+】（自分のことを理解してほしい）を保持するものであった。このようなフェイス・ワークが行なわれる「なんか」は、対人的機能を持つと言える。同じフィラーであっても、(5) のような「なんか」は、話し手が聞き手の発話内容や考えを引用する場合には、それが決して正確な引用ではないことを示唆し、聞き手の【PF+】に配慮していた。これは、従来の用法が持つ「不特定な指示」や「他の可能性の示唆」と無関係でないことを意味している。

3.2 「ていうか」についての考察と結果

「ていうか」の従来の用法は、話し手が自分の発話内での、あるいは相手である聞き手の発話内

での語句や文をより適切な形へと修正するという、言語表現自体について語るメタ言語的なものであった。

(6) 「あの人、うざいていうか、きもい」 (話し手の発話内での語句や文の修正)

(7) a 「あの人、きもくない？」

b 「ていうか、うざい」 (聞き手の発話内での語句や文の修正)

これが、語用論的機能では、聞き手の発話内容、話題、発話権や仮想の会話^{*1}へと修正の範囲を拡大していた。

(8) a 「俺は一度恋愛したら、その相手とは結婚するつもりで付き合うよ」

b 「ていうか、それ、ありえないから」 (聞き手の発話内容に対する修正)

(9) a 「さっきの試験、マジやばい。留年するかも・・・」

b 「ていうか、飯食いに行こうぜ」 (聞き手の話題に対する修正)

(10) a 「昨日バイトで、マジムカつくことあってさ、店長のやつ・・・」

b 「つうか、俺もバイトでさ・・・」 (聞き手の発話の権利に対する修正)

(11) a 「相手の仮想上の発話内容・話題・発話権」

b 「ていうか、最近調子どう？」 (聞き手の仮想の会話に対する修正)

聞き手の発話内容、話題、発話権や仮想の会話を修正、つまりこれに異議申し立てを行なうことは、話し手のなんらかの評価や態度を聞き手に伝えることになる。そしてこの評価がマイナスの場合、聞き手の【PF+】を脅かし、話し手自身の【PF-】も脅かすことになるため、それを避けるフェイス・ワークが行なわれていた。

文頭で使用される若者言葉「ていうか」の用法は、文中に見られた従来の用法では語や文をメタ言語的に修正していたものが、聞き手の言語形式、発話の内容、話題や発話の権利にまでメタ言語的な修正の範囲を広めたものであると言える。ただし、あくまで相手の発話の形式にのみ異議があ

^{*1} 仮想会話のメタ言語レベルの修正とは、仮想上の相手の発話内容、発話の話題あるいは仮想上の発話権を指し、それぞれについて区別はしない。本稿は、メタ言語レベルの修正が仮想上の会話に適用できることへ示唆を与えるにとどめる。

るというふりをすることによって、FTA を最小限にするというフェイス・ワークを行っているということである。そして、本論文でとりあげた若者言葉の「ていうか」は、従来の用法が持つ意味論的機能を受け継ぎつつ、語用論的機能へと拡張されたと言える。

3.3 「みたいな」についての考察と結果

従来の用法では、「恋人みたいな関係」のように、比喩という Propositional（命題的）なものであった。このような比喩は関連性理論（Relevance Theory）においてルース・トークのひとつとして扱われているが、若者言葉「みたいな」では、このルース・トーク用法を核として、発話の理解を促す Textual（テキスト的）なものへ、さらに聞き手の発話や考えを話し手が引用し、話し手の評価や態度を示す Interpersonal（対人的）なものへと拡張していることが確認できた。

(12) 「ニャンニャンはどういう意味なの？」

「ニャンニャン元気，みたいな」（テキスト的）

(13) 経験があるから今がある みたいな（対人的）

また、対人的機能を持つルース・トーク用法には、本来フェイス・ワークの必要のないところでフェイス・ワークを行なう話し手志向の用法も確認された。

(14) 「鈴木君はさぁ、もしかして田中さんのこと好きなんじゃないの？みたいな？」

(14) は、聞き手の発話内容から、話し手が推意する聞き手に関わる内容であり、話し手が自分の推意が正しいかどうかを聞き手に確認するものである。話し手が勝手に聞き手の人物像や心情を決め付けてしまうことは、聞き手の【NF-】（押し付けないでほしい）を脅かす恐れがある。そこで、疑問形のストラテジーを使用し、聞き手の【NF-】を守っている。疑問形のストラテジーによって、聞き手の【NF-】が守られれば、結果的に話し手の PF も守られるはずであるが、文末に「みたいな」を使用することで、「本気でそう思っているわけではない」ということを伝え、話し手は自分の【PF-】（嫌われたくない）をさらに保持していた。このような、自分のフェイスが脅かされる恐れがあまりない場面でも、過剰に自分のフェイスを守ろうとする用法は、若者言葉に特徴的な用法であると言える。

「みたいな」の拡張の過程は、Traugott（1982）の主張する文法化（grammaticalization）の過程である、言語表現の意味は命題レベルから、テキストレベルへ、そして対人的レベルにまで拡張されるという仮説を支持するものと言える。

3.4 「じゃん」についての考察と結果

若者による「じゃん」の新しい用法は、従来の用法と深く関係しており、この従来の用法を拡張したものであると言える。本論文が示した従来の用法では「じゃん」に先行する部分は、一般性の高い情報であり、聞き手の【NF-】を脅かさない。また、話し手自身もあえて【PF+】を保持しなくても良いものであった。このようにフェイス・ワークが行なわれないものを従来の用法とした。

(15) は、従来の用法「じゃん」の例である。

(15) おいしい？って聞いたら普通おいしいとかまずいっていうじゃん。

この従来の用法が、これから話す内容の前提となる知識を聞き手に提供し、発話内容への理解を促し、会話全体に貢献するテキスト的な話題導入によって使用される用法 (16) へと拡張した。さらに、話し手の聞き手に対する否定的な評価を暗示する、対人的な用法 (17) へと拡張したと考えられる。この拡張の過程は、Traugottの主張する文法化の過程と一致している。

(16) 「なんか洋服とかで流行とかあるじゃん」

「うん」

「ああいうのでこれ買っとけとかあるじゃない？雑誌とかで」

「うん」

(17) 「だから、学校でちゃんとやってれば他でもちゃんとできるでしょって話」

「でも学校でできなくても他でできる時とかあんじゃん」

話し手の聞き手に対する否定的な評価を暗示する場面で「じゃん」が使用される場合、聞き手の【PF+】や【NF-】をつぶしてでも、話し手が自分の【PF+】を保持することが確認された。

(18) それはただ鈴木君が勘違いしてるだけじゃん

本論文では、話し手のフェイス保持のために、聞き手のフェイスをつぶす行為も、フェイス・ワークであると考えするため、(18) の用法も話し手のみによって行なわれる対人的行為とみなす。

最近その使用が話題になった若者言葉「じゃん」の特徴は、「じゃん」に先行する発話内容が話し手の個人的な情報だということである。

(19) わたし今高校が高卒もらえるデザインの学校行ってん じゃん。で、わたしが安全策いると
かってありえない じゃん

これは「じゃん」の従来の用法からの拡張であると考え。話し手は自分の個人的な内容であっても、形式上は一般論であるかのように語り、聞き手が容易にアクセスできる情報のように振舞うのである。個人的な情報であっても、誰もが容易にアクセス可能な一般論にしてしまうことで、聞き手に反論させない方略であろう。聞き手である私たちがこの用法に違和感をおぼえるのは、本来必要である聞き手の【NF-】に対する配慮が行なわれずに、話し手の【PF+】のみ保持されているためである。

3.5 「とか」についての考察と結果

若者による「とか」の新しい用法は、従来の用法と深く関係しており、この従来の意味論的機能を拡張したものであると言える。従来の用法では「とか」に先行する部分は一例であり、他にも可能性があることを示唆し、「服とか靴とか買いに行こう」のように関連のある語句を並列して語る命題的なものであった。これがルース・トークとして機能すると、聞き手の処理労力を軽減し、発話内容の理解を促す会話全体へ貢献するテキスト的なものへと、そして、聞き手の発話内容や意見、あるいは考えを引用し、そこに話し手の評価を暗示する対人的レベルへと拡張していることが確認できた。

(20)「さっき、鈴木君俺のこと自分勝手だとか言ってたじゃん。それ、マジ傷つくんだけど。」

この拡張の過程も、Traugottの主張する文法化(grammaticalization)の過程である、言語表現の意味は命題レベルから、テキストレベルへ、そして対人的レベルにまで拡張されるという仮説を支持するものと言える。

4. まとめと今後の課題

佐竹(1995)は、「じゃないですか」「とか」「みたいな」などの若者言葉の分析から、若者たちは「自分の発言の正当性、妥当性に対する自身のなさからくる不安」(佐竹1995:60)を常に持ち、この不安が、自分が聞き手の考えとはずれているのではないかという恐れ、それによって仲間から浮いてしまうことへの恐れにつながると主張している。そして、こうした不安や恐れに対する方策として、「断定回避」や「ぼかし表現」として機能する「とか」や「みたいな」を使用するとも主張している。しかし、例えば「とか」は、先行する部分が聞き手の発話内容や考えに関わる内容であり、それが実質的にはひとつに限定されるものであっても、形式的に他の可能性を指示することで、自分の【PF-】と聞き手の【PF+】を保持しながら、相手の発話内容や考えを否定する際にも使用されていた。また、若者が使用する新しい用法の多くは、婉曲表現とは異なり、事

実そのものについて語りながらも、発言責任を回避する「ぼかし表現」であることから、若者には佐竹の主張する「不安や恐れ」と同時に、それとは反対に「自分のことをもっと理解してほしい」という気持ちも内在していると考えられる。そして、この「理解してほしい」という気持ちは「不安や恐れ」と同様に強く働くと考えられる。もし、語ることに對する不安や、聞き手と自分の考えにズレがあることを恐れるのであれば、相手を否定的に評価する発話は行なわないはずである。なぜなら、相手を非難することは、聞き手の【PF+】を脅かすことであり、同時に話し手の【PF-】を脅かすことになるためである。

また、本論文の考察から導き出された「ていうか」の機能は、相手の発話内容や話題、発話権をメタ言語的に修正して、それに対する異議申し立てをおこなうものであった。さらに「ていうか」が、仮想の会話をメタ言語的に修正し、それに対して異議申し立てを行なう用法などは「友人を傷つけまいと必死な姿」よりも「理解されたい」心理が強く働いていると言えよう。この「ていうか」の特徴は、話し手が何の脈略もなく会話を始める場面で使用され、まるで聞き手と今まで会話していたかのように振舞うものである。例えば「ていうか、昨日彼氏とケンカしちゃってさ・・・」のように、何の前触れもなくいきなり会話が始まるのである。本来であればこのような行為は、聞き手の【NF-】（押し付けられたくない）を脅かすことにつながるため、その緩和策として「ちょっと聞いてくれる？」などの前置きが必要であろう。しかし、若者による新しい「ていうか」では、新たに会話を始めることを聞き手に了承させるというよりも、既に会話が存在し、その会話の中で、話し手の話題提示や発話権の獲得が正当なものであることを聞き手に示すものと言える。このように、話し手の【PF+】を満たすために聞き手の【NF-】保持の手続きを省略する行為は、若者言葉に特徴的であり、若者の自分を「理解してほしい」という心理が非常によく表れていると言える。

本論文の考察結果から考えられる若者の心理であるが、今まで概観してきた先行研究が主張する若者の心理とは多少異なっている。本論文でも、若者には確かに語ることに「不安や恐れ」の気持ちはあると考える。しかし、それと同時に、時にはそれ以上に自分のことを「理解してほしい、認めてほしい」という心理が働くと考えられる。「じゃん」には、その心理が強く表れており、「ていうか」においても、聞き手の【PF+】を守りながら、聞き手の考えや意見を修正するところなどは、「理解されたい」心理の現れであると言える。実際は、聞き手の考えや意見などに対する異議申し立てでありながら、形式上は語句や文の修正のように振舞うことで、事実そのものについて述べながらも、話し手の【PF-】は保持されるのである。また、ルース・トークの標識として機能し、話し手の発話内容に対する責任を回避する「みたいな」「とか」などがなぜ責任回避をするのかといえば、それは話し手が嫌われずに自分の意見や考えを相手に理解させたいためであろう。このように「嫌われたくない、でもそれ以上に自分を理解してほしい」という欲求が、若者の心理であると考えられる。事実そのものについて述べながら自分のフェイスは保持できるという、若者言葉のフェ

イス・ワークからもその特徴が見て取れる。

しかし、本論文で示した若者の心理は普遍のものではなく、どの時代にも当てはまるとは言えない。大坊（2006）、米川（2006）、井上（2006）では、携帯電話やパソコンなどの普及によって、若者のコミュニケーションスタイルが変化したことにより、若者言葉を使用する若者の心理も変化したと主張している。対面した対人コミュニケーションであれば、自分のフェイスを保持するためには、相手のフェイスへ意識することが必要であるが、ネット型の間接的コミュニケーションにおいては、匿名性が高く、たとえ相手を厳しく非難したり、中傷しても自分のフェイスが脅かされることはない。他者に対する意識、いわば他者のフェイスに対する意識の薄れは、対面した対人コミュニケーションにどのような影響となって現れるのであろうか。今後は、若者を取り巻くパソコンやインターネット、携帯電話の使用なども視野に入れ、ネット型といわれる若者から、実際に会話を収集するなどして、本論文で扱った若者言葉の使われ方や、若者の心理について明らかにする必要があるだろう。

また、本論文では、若者が使用する「なんか」「ていうか」「みたいな」「じゃん」「とか」などの新しい用法と従来の用法との関係を文法化のモデルによって説明した。その際、起こるとされる「意味の漂白」などについては、今後さらにデータを増やし検証していく必要がある。

参考文献

- 秋元実治（2003）『文法化とイディオム化』ひつじ書房
- 井上逸兵（2006）「ネット社会の若者ことば」『月刊言語』第35巻3号
- 内田らら（2001）「会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』24（2），1－9.
- 佐竹秀雄（1995）「若者言葉のレトリック」『日本語学』Vol. 14, 11月号，53－60.
- 大坊郁夫（2006）「若者のコミュニケーション環境」『月刊言語』第35巻3号
- ナロック，ハイコ（2005）「日本語話し言葉データの表記マニュアル」Ms.東北大学
- 福原裕一（2005）「ディスコース・マーカ―「なんか」におけるポライトネス機能についてー若者言葉を中心にー」『社会言語科学会第15回大会発表論文集』社会言語科学会 12-19.
- メイナード，泉子・K（2004）『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- 米川明彦（1998）『若者語を科学する』明示書院
- 米川明彦（2006）「若者ことば研究序説」『月刊言語』第35巻3号
- Brown, Penelope. & Levinson, Stephen. (1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. New York: Cambridge University Press.

Goffman, Erving. (1967) *Interaction ritual: essays on face-to-face Behavior*. New York: Garden City.
Traugott, Elizabeth, Closs. (1982) From propositional to textual and expressive meaning: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel, eds., *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-71.

論文審査結果の要旨

本論文は、ディスコース・マーカ―が新しい用法を獲得する際に、フェイス・ワークがその駆動力となることを、若者言葉をデータとして実証したものである。

フェイスとはいわゆる「顔」「面子」のことであるが、社会言語学や語用論の分野では、人は誰しも「認められたい、嫌われたくない」というポジティブ・フェイスと、「行動を制約されたくない、一人でいたい」というネガティブ・フェイスの二つを持つとされる。このようなフェイスを保持する行為をフェイス・ワークと呼ぶ。

一方ディスコース・マーカ―とは、順接・逆接、話題転換、発話権表示など、談話の流れや語用論的推論の方向を示す語彙を言う。本論文では、「なんか」「ていうか」「みたいな」「じゃん」「とか」が取り上げられている。

この論文の特長は第一に、10代後半の若者による生の自然な言語データを大量に収集したことにある。文字化されたデータには、全国から集まった男女の発話が収められており、今後の会話研究にとっても貴重なデータベースとなろう。

第二の特長は、さまざまな品詞に由来するディスコース・マーカ―が、どのようにして従来の規範的用法から、対人調節機能や感情表出機能を持つに至ったかが自然に、説得力を持って記述されている点である。

第三の特長は、先行研究において「ぼかし表現」「ソフト化」などと呼ばれてきた現象を、フェイス・ワークという大きな理論体系の中に組み込んで説明することに成功している点である。

フェイス・ワークに関しては、これまで聞き手のフェイス保持の研究に特化したポライトネス理論が発展を見せているが、ディスコース・マーカ―の用法拡張には、聞き手のフェイスに対する配慮はもちろん、話し手のフェイス保持をも考慮に入れることが非常に重要であることを具体的かつ詳細に示しており、この分野における理論的貢献は大きい。

語義拡張の説明に補助的に用いられた仮説に、必ずしも最近の理論が反映されているとは言えない点、若干の飛躍やあいまいな記述が散見されることは残念であるが、本論文の価値を損なうとまでは言えない。

幅広いデータの手がたい分析であると同時に、理論とデータの双方に興味深い新知見が多く、その成果は論文提出者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。

要約の内容

得られた結果を、以下に要約する。

本研究は、以下の仮説を検証した。

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」

「日本企業は、海外市場で競争力を持つために、海外市場の文化を理解し、その文化に合わせた製品を開発する必要がある。」